

開発領主の血筋・平田平太郎家

「歴史とみちの館」所蔵・平田家文書を読む
 (村歴史文化財調査委員 渡辺伸栄)

連載一周年を機に、貴重な古文書を残した平田平太郎家に敬意を表し、その紹介をします。

【一】小見の平太郎家は、上杉景勝が徳川家康に敗れて米沢へ移された後、上杉家を離れ小見に定住した平田平内から始まります。

平内は、水利の悪い荒川右岸段丘上の原野の開拓に専念し、平内新村、滝原村を開きました。

平内の来村には背景があります。

関ヶ原合戦(一六〇〇年)の前年、会津領主の景勝は、旧領越後国内のかく乱を企てます。平内の祖父・平田常範は、そのための指揮官の一人として越後へ進出し、小見村に駐屯します。

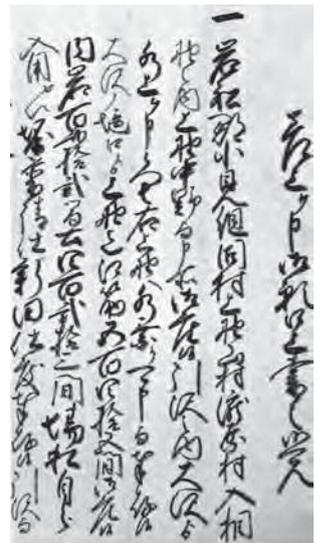
しかし、関ヶ原で家康が勝者となり、景勝の企ては失敗、常範は撤退します。その際、

従軍した一族郎党の中には、撤退せず現地残留の人たちがいきました。平内の移住は、そのような地縁血縁があつたからでした。

なお、平太郎家では、会津芦名家四宿老の一人で鑑ヶ城城主・平田盛範を家の始祖(初代)としており、平内は六代目になります。その子平太郎は滝原、辰田新、上野山の新田を開発。以後代々の当主は平太郎を襲名します。古文書を村に寄贈された甲太郎氏(大阪移住)は平太郎家の十七代目です。

また、前村長平田大六氏の家は、平内の弟八兵衛の子十兵衛が、上杉家臣だった父の死後、小見村に移住したのが始まりで、以来約四〇〇年脈々と家をつないでおられます。

出典・甲太郎氏作成「奥州会津平田氏系譜」(平田大六氏所蔵)



【二】享保十二(一七二七)〜十七(一七三二)年の文書五通から、平太郎家の新田開発の実際を知ることができま

①小見組大庄屋平太郎から代官所への願書(写真・部分)

「小見村・上野山村・滝原村三ヶ村入会地の上野中野を開発したい。用水は、引ノ沢(現・吹ノ沢)の上流大沢に堰を造り五四五間(内一二二間は岩山)の水路を掘る。引ノ沢の湯水対策としてハンノキヤチに溜池を造る。その田の持ち主には、代替に自分の田を提供し、その分の年貢は自分が負担する。開発費用は一切自分持ちで、三ヶ村には負担させない」

文書には、代官所役人三名の裏書があり、三年間免税、その後は、取れ高の十分の一を永年免税にするとあります。

②新田開発に参加する三ヶ村百姓衆三十八名が連名で、平

太郎に出した念書
 「全員の田に平等に水が懸るように毎日交代で水番する。雨降りには夜でも堰板を外す。当番は、不公平にならないように帳面につけて順番に行く。当番を怠けたら新田を取り上げられても文句は言わない」
 等々、細々と約束しています。
 ③三ヶ村の村役人が平太郎に出した証文

「開発の費用を出してくれたので、新田のうち四町五反歩を平太郎の持田にすることに異存はない」
 ④三ヶ村の村役人から代官所への願書
 「多額の費用を出してくれたので、四町五反歩は平太郎の持分にしてほしい」
 代官所役人の承諾の裏書があります。

⑤ハンノキヤチの田の持ち主二人が、平太郎に出した証文
 「替地を受け取ったので、溜池に異存はない」
 なお、ハンノキヤチの溜池は現存しています。今も、吹ノ沢の水が不足の時は、堰を切って水を落とす決まりになっているそうです。



【三】平太郎家の先祖は会津地方の開発領主です。集団を束ねて荒地を開拓し、農地を守ることは武士の本業でした。それが、戦国末期になって兵農分離が進み、城下町に集まります。

平田一族の帰農は、武士本来の姿への先祖返りだった様に思えます。自ら百姓に身分を落とし、刀を捨てて鋤に持ち替え、条件の悪い土地の開墾の先頭に立つ。開拓者たちは、そこに、身分に代えがたい夢やロマンを感じたのかも

しれません。
 古文書から、そんな気概が伝わってきます。
 (原文と解説は歴史館に展示)